翻刻『源氏物語古註』（三十七）——よこ笛——

（山口県文書館蔵　右田毛利家伝来細川幽斎自筆本）

熊本守雄

凡例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽斎自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽斎が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成に攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「よこ笛」一帖を翻刻したものである。

二、「よこ笛」一帖は、二括より成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で二括りある。

第一括　料紙五枚十葉（その内、端一丁は、前表紙の見返しとして使われており、墨付は九丁）

第二括　料紙四枚八葉（その内、端一丁は、後表紙の見返しとして使われており、墨付は七丁）

料紙十八葉の内、墨付は十六丁、三十一面に及んでいる。

三、「よこ笛」一帖の翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1　注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「　」を付し、示した。

2　原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3　原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに、〈1オ〉〈1ウ〉〈2オ〉〈2ウ〉などの記号をつけた。

4　原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、㈠と、かっこを付して示した。

5　現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6　本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、（マヽ）と記した。

○　資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「よこぶえ」、うたをもて、まきのなとす。源氏四十九歳の春よりあきまでのことあり。かほる二歳。

一、「こ権大納言」とハ、かしハ木、うせ給たるを、かなしまぬ人なきと也。

一、「六条院にも」とハ、源氏ハ、大かたのよにつけてだに、めやすき人のなくなるをおしミ給ふ。まして、このかしは木ハ、あさ夕にしたしくまいりなれつゝ、人よりも御心とゞめておぼしたりしかバ、「いかにぞや」とハ、かし木、女三の宮に密懐せしことおぼしめしいでながら、あハれはおほく、しのび給ける也。「御はてにも」とハ、かしハ木一周忌のとぶらひにも、ずきやう心ことにせさせ給て、「よろづをしらずがほにて、いはけなき御ありさま」とハ、かほるを見給ふに、哀なれば、御心のうちに、心ざして、こがね百両をべちにせさせ給ける。「おとゞハ」とハ、内府ハ、心しり給ハでぞ、かしこまりよろこび給ける〈1オ〉

一、「大将のきミも」、ずきやうとりもちてねんごろにいとなミ給ふ。「かの一条の宮をも」、このほどの御心ざしふかく、かしハ木のはらからのきんだちよりもまさりて、夕ぎりとぶらひ給へる也。「いとかく思ひきこえざりき」と、内府の夫婦も、夕ぎりの心ざしをよろこび給ふ也。なきあとまで、かしハ木のおぼえおもく物し給けるほどのミゆるにも、いみじうあたらしう、おぼしこがるゝことつきせずおぼす也。

一、「山のみかどハ」とは、朱雀院ハ、女二の宮もかく人わらへにながめ給ふなり、女三の宮も此世の人めかしきかたハ、かけはなれ給へば、さま〴〵にあかずおぼさるれど、この世をおぼしなやまじとしのび給ふ也。「しのび」ハ、堪忍し給ふ也。「おなじミちをこそ」とハ、同蓮にむまれあひ給はん事をねがひ給ふ也。女三の宮と同蓮にと也。〈1ウ〉

一、「つとめ給ふらめ」とは、女三の宮もおなじはちすにむまれあはんとぞをこなひつとめ給ふらんと朱雀院おぼしめしやり給ふ也。

一、「かゝるさまになり給てのち」とは、あまになり給てのちハ、はかなきことにつけてもたえず女三の宮を朱雀院とぶらひ給ふ也。

一、「ミてらのかたハらに」とハ、仁和寺のほとりのはやしにぬきいでたるたかう、引、逆等未レ抽ニ鳴鳳管一、盤根纔點ニ卧龍文一。「たかうな」ハ、たけのこ也。そのわたりにほれるところなど、女の宮に朱雀院よりまいらせ給へる也。御文こまやかなり。春の野山ハ、文言也。ほりいでさせたるハ、ところ也。

一、「よをわかれいりなんみちハをくるともおなじところをきミもたづねよ」、やまにこそ女三の宮いりをくれ給ふとも、のちの世ハおなじはちすにといのり給への心也。「いとかたきことに」とハ、父子至親岐路各別。〈2オ〉おや子むまれあふことハかたき事と也。なみだぐミて女三の宮見給ふ也。

(一)、「おとゞのきミ」とハ、源氏おハしましたる也。「れいならず、おまへちかきらいしどもを」とハ、たかつきのうへにふちをたかくつけたる物也。くだ物などいるゝ物也。「院の御文」とハ、朱雀院の御ふミ也。

一、「けふかあすかの心ちする」とハ、臨終のちかづきたると也。女三の宮にたいめんなきを心にかなハず、おぼさるゝと也。此おなじところの御ともなひを、ことにおかしきふしもなきを、げにさぞおぼすらんと、源氏われさへ女三の宮にをろかなるやうみえたてまつりて、いかにうしろめたき御思ひそふらんと、朱雀院の御心いとをし、とおぼす也。

一、「御かへりつゝましげに」とハ、女三の宮はづかしげにかき給て、御つかひに、あをにびのあや給ハせたる也。「かきかへ給へる」とハ、御ふミかきかへ給たるかミの、木丁のそばよりミゆるを、源氏とりてミ給ふ也。女三のミやの〈2ウ〉御かへし、源氏見給ふべきやうなきを、かきそこなハせ給たるとかける記者の心たて現気なると也。此文源氏給ハずむねならんと也。

一、「御手いとはかなだちて」とハ、女三の宮の御て也。

㈠、「うき世にハあらぬところのゆかしくてそむく山ぢに思ひこそいれ」、心ハ、六条院にあらぬところのゆかしきに、朱雀院の御山ずミにわれもおもひいらばやの心也。ところをたちいれて也。朱雀院御哥も、ところをおりいれて、よミ給たる也。

一、「うしろめたげなる」とハ、朱雀院、女三の宮うしろめたげにの給ふに、此あらぬところのゆかしきと女三の宮よミ給へる、いとうたてしき御心と源氏の給ふ也。いまハ女三の宮にも源氏にみえ給ハぬ也。

一、「らうたげなる」とハ、女三の宮のあまひたゐを、源氏見給ふにつけて、などかうハなりにし事ぞと、つミえぬべくおぼすと也。〈3オ〉御木丁ばかりへだてゝ、又こよなうけどをく、もてなしてぞ源氏おハしましける。「わかぎミハ」とハ、かほるハ、ね給へりける。おきて源氏の御そでをひきまつハれ給ふさま、うつくし。しろきうす物に、こうばゐの御ぞ、しどけなくうしろにひきやられて、御身ハあらハに、きなし給へる也。いとらうたげにしろくそびやかに、やなぎをけづりてつくりたらんやうなると也。「やなぎ」、しろきたとへ也。「そびやか」ハ、うつくしき也。「かしら露くさして」とハ、かミのあをやかにおひたるハ、つきくさの花にていろどりたるやうなると也。「露くさ」とハ、つき草をいふ也。

一、「くちつき、まミのびらかに」とハ、くちめつかひなどハ、かしハ木にたると源氏御らんずる也。かれハいとかやうにきハはなれたるきよらハなかりしと、かしハ木のおもかげ思ひくらべ給ふ也。「宮にも」とハ、女三の宮にも、かほるに給ハぬ也。いまよりけだかく、さまことにみえ給へるけし〈3ウ〉などは、わがかゞみのかげにもに給たるとおぼす也。わづかにあゆミなどし給ふほどなると也。此たかうなのらいしに、なにもしらでたちよりて、あハたゝしくとりちらして、くゐかなぐりなどし給へば、「いとふびんなり」とハ、いたハしやといへる心也。「かれとりかくせ」とハ、たかうなとりかくせ、くゐ物にめとゞめ給ふと、物いひさがなき女房などもこそいひなせとて、源氏わらひ給ふ也。ゐだき給て、此きミのまみのいまよりけしきあるかな。ちいさきちごを、あまたミねばにや、たゞいはけなきほどハ、はかなき物とのミみしを、いまよりいとけハひことにみえたるこそわづらハしけれ。女宮物し給めるあたりに、かゝ人おひいでゝ、くるしき事、たがためにもあらんかし。あはれ、その世までハ、見はてんやハ。花のさかりハありなめどゝの給ふ。引哥、としごとに花のさかりハありなめどあひミんことハいのちなりけり。〈4オ〉かほるをうちまもりて、源氏の給ふ也。「うたてゆゝしきことにも」とは、めのなどのいへる也。「御はのおひいづるに」とハ、かほる、はにくゐあてんと、たかうなをつとにぎりて、しづくもよゝとくゐぬらし給ふ。引哥、五月雨のよゝとなきつゝほとゝぎす夜ふかくなきていづちゆくらん。よゝといふことばバかり引也。しづくいたくおつるの心也。

一、「ねぢけたるいろごのミ」とハ、いろごのミ給ふべき人にハひきたがへて、くゐ物にめとゞめ給ふとわらひ給ふ也。「ねぢけたる」ハ、ねぢするかひたる心也。

一、「うきふしもわすれずながらくれたけの子ハすてがたき物にぞありける」、女三の宮の密契のうきハわすれずながら、かほるハすてがた

きと也。「ゐてはなちて」とハ、かほるのもち給へるたけのこを、とりはなちて也。源氏此哥を、かほるにの給ひかくる也。かほるうちわらひて、なにともおもひたらず、いとそゝかハしくはひおりさハぎ給ふ。「そゝかハしき」〈4ウ〉とは、みだりがハしき也。「はひおりて」、源氏のひざよりおりて也。

一、「月日にそへて、此きミの」とハ、かほるのうつくしくおハするに、まことに女三の宮のうきし（マヽ）を、源氏おぼしわすれぬべしと也。「此人の」とハ、かほるのむまれ給ふべきちぎりにや、思ひのほかの事もありけん、とのがれがたかなるすくせぞかし、とすこしハ源氏おぼしなをす也。

㈠、「ミづからの御すくせも」とハ、わがすくせも、あかぬ事おほく、あまたつどへ給へるおもひ、人の中に、女三の宮こそ、かたほなるおもひなく、思ふやうなる御中とあかぬ所なくおぼしつるを、かくおもハずなるさまにて見奉る事、とおぼすにつけて、かしハ木のつミゆるしがたく、おぼす也。

一、大将のきミハ、かしハ木のいまハのとぢめにとゞめし一ことを、おもひいでつゝ、いかなりし事ぞと、源氏に聞えまほしう、「ほの心えて」とは、女三の宮にかしハ木心をかけし事ならん、と夕ぎりおぼしたる也。〈5オ〉

㈡、「中〳〵うちきこえんも」とは、源氏に申あらハさんもかたハらいたくて、いかならんついでに、此事のくハしきありさまもあきらめ、又かしハ木の思ひ入たりしさまも、きこしめさせんと思わたる也。

一、「あきの夕の物あハれなる」、引哥、春はたゞ花のひとへさくばかり物のあハれハあきぞまされる。一条の宮に夕ぎりまいり給へる也。

一、しめやかに、御ことゞもひき給ふほど也。「ふかくもとりやらで」とは、ことをおくふかくもとりいれずして、みなミのひさしに夕ぎりいれ奉り給へる也。はしつかたにゐたる人の、ゐざり入つるけハひ、きぬのをとも、にほひかうばしく、心にくほ（マヽ）どなる也。ミやすところたいめんし給ふ也。

一、「わがとのゝ」とハ、夕ぎりわが御所のおさなき君（きん）だち、すだきあハて給ふにならひ給て、しづかなるをあハれとおぼす也。うちあれたる心ちすれど、けだかくすミ給たる夕ばへをながめて、わごんをひき〈5ウ〉よせ給へば、「りちにしらべられて」とハ、時もあきのてうし、女もりちをこのむてうしなれば、いとよくひきならされたるもなつかしきと也。

一、かやうのあたりに、思ひのまゝなるすき心あらん人ハ、しづむる事なく、さまあしきけハひあらハし、うき名（な）をもたつるぞかし、とおもひつゝかきならし給ふ。かしは木のつねにひきしことなりけり。おかしきてひとつ、夕ぎりひきて、あハれ、めづらかなるねに、かしハ木ひき給しはや。女二の宮の御ことにもこもりて侍らんかし。うけ給ハりあらハしてしがな、と夕ぎりの給ふ也。ことのをたえにしのち、むかしのわらハあそびのなごりをだに、女二のミや思ひいで給ハずなりにて侍る、と御息所の給ふ也。かしハ木にをくれ給て、ことのをたちしのち也。「院のおまへにて」とハ、朱雀院のおまへにて、をんな宮たちとり〴〵の御ことども、心ミ給しに、女二の宮ことひき給ふ事ハ、おぼめかしからずおハしますと、院もさだめ〈6オ〉させ給し。かしハ木にわかれほれ〴〵しう、ながめすぐし給ふれば、「よのうきつまといふやうになん」とハ、かしハ木をうきつまとも（マヽ）たせて也。つまはしといふやうに也。引哥、あさぢふのをざゝがはらにをく露ぞ世（よ）のうきつまと思みだるゝ。いとことハりの思ひなりや。「かぎりだにある」とハ、夕ぎりかぎりなくかしハ木の事おもふとの給て、した心は女二のを（マヽ）かぎりなくおもふの心也。「ことハをしやり給ふ」、夕ぎりわごんハをしのけてゐ給へる也。

一、「かれ、さらば、こゐにつたハることもやと、きゝわくばかりなら

させ給へ」とハ、かしハ木の手、夕ぎりのことのねにつたハりたるよと、きゝわくばかりひかせ給へと御息所の給ふ也。以楽傳語の心也。夕ぎりとかしハ木、知音なれば也。物むつかしおもふ給へしづめるみゝをだにあきらめ侍らん、如レ聴ニ仙楽一耳暫明。〈6ウ〉

一、「しかつたハる中のを」とハ、女二のミやの御ことにこそかしハ木の手はつたハるべけれ。それをこそうけ給ハりあらハさんとハ申つれ、と夕ぎりの給ふ也。「中のを」とハ、和琴の第二のをゝいへる也。女二の宮と柏木の中也。

一、「みすのもとに」とハ、女二の宮おハしますみすのもとにことをゝしよせ給へど、とみにもうけひき給ふまじきことなれば、夕ぎりしゐてもきこえ給ハぬ也。

一、はねうちかハすかりがねも、つらねをはなれぬを、女二の宮うらやましくきゝ給ふらん、と夕ぎりおぼす也。引哥、あき風につらをはなれぬかりがねは春ハくるともかへらざらなん。風はださむく、物あハれなるさそハれて、「さうのことをほのかにかきならし」とハ、宮す所のさうのことほのかにひき給たる也。「風はださむく」引哥、はださむくあきのさ夜風ふくなべにふりにし人は夢に見えつゝ。〈7オ〉

一、「いとゞ心とまりて」とハ、夕ぎり心とまりはてゝおぼさるれば、びわをとりよせて、さうふれんをひきて、「思ひをよびがほ」とハ、わがひくことにつけてあそバせとすゝめ奉るハかたハらいたけれど、これハことゝハせ給ふべくやとて、せちに女二の宮にさうふれんを夕ぎりそゝのかし給ふ也。「ましてつゝましき」とハ、さうふれんハおとこをこふるといへるがくなれバ、女二の宮ひきかね給ふ也。夕ぎりよミ給ふ。

一、「ことにいでゝいはぬもいふにまさるとハ人にはぢたるけしきをぞみる」、ときこえ給ふに、するつかたをほのかにひき給ふ。「ことばにいでゝいはぬいふまさる」とハ、人にはぢての事といはれてひき給ふ也。

一、「ふかきよのあハればかりハきゝわけどことよりほかにえやハいひける」とハ、さうふれんをあハれとハきゝつれど、ことにひくよりほかにはいかゞいはんの心也。ことをたちいれて也。夕ぎりの哥もことたちいれて也。〈7ウ〉

一、さるはおほとかなると相夫戀のおもしくおほやうなるを、女のすこしひきてやミ給へるハ、うらめしきまで夕ぎりおぼす也。

一、すきゞ〳〵しさを、さま〳〵にひきいでゝも御らんぜられぬるかな。秋のよふかし侍らんも、かしハ木のとがもやと、まかでぬる。ことさらに心してさぶらうべきを、此ことゞもしらべかハらでまたせ給ハんや。ひきたがふる事も侍ぬべき世なればと、まほにあらね、にほハしをきていで給ぬ。「にほハしをきて」ハ、ほのめかして也。

一、「こよひの御すきに、人ゆるしきこえつべく」とハ、かしハ木に御知音ゆへに、旧跡をとぶらひ給たるばかりにて、けさう心なき御あそびなれば、人もとがむまじきと御息所の給ふ也。「玉にせん心ちし侍らぬ」とハ、むかしがたりばかりにて、おもしろきほどにもことを夕ぎりあそバさねばの心也。引哥、かた糸をこなたかなたによりかけてあハ〈8オ〉ずはなにを玉のをにせん。ことのをによせての給たる也。御をくり物にふえそへて奉り給ふ。別のかづけ物にふえそへてまいらせ給也。「これになん」とハ、此ふえに、かしハ木ことのはもつたハらんときゝをきたると宮す所の給ふ也。引、向秀過ニ山陽旧居一　思ニ嵇康一　聞ニ隣人笛吹一　作ニ旧賦一。　隣人有ニ　吹レ笛者一　發レ聲嘹喨追ニ想曩昔遊讌好一。　かゝるよもぎふに、此ふえうづもるゝもあハれにミ給ふるを、夕ぎりのみさきをふべきこゑに、きほハんを、よそながらもいぶかしう侍ると聞え給ふ也。「きほはん」とは、さきのこゑにあらそふほど、夕ぎりのふき給ハんがゆかしきと

也。「いぶかしき」ハ、ゆかしき也。「につかハしからぬずいじん」とハ、此ふえをずいじんにせんハ、にあハぬと夕ぎりの給ふ也。くるまのさきハ随身のをへば、ミさきのこゑにきほはんと宮す所のの給ひしをうけて、ふえを随身にせんはにつかハしからぬ、と夕ぎりの給へる也。「とりて見給ふに」とハ、此ふえみ給ふに、〈8ウ〉これもげによとゝもに身にそへてもてあそびて、ミづからもさらに此ふえのねのかぎり、えふきとをさず、おもハん人にいかでつたへてしがなと、かしハ木おり〳〵きこえごちし、と夕ぎりの給ふ也。「おもはん人」とハ、執心の人につたへまほしきとの給しと也。「きこえごち」とハ、いひたるといふことば也。いますこしあハれそひて、夕ぎりふきならし給ふ也。「ばんじきてう」、あきふゆかけたるてうし也。「むかしをしのぶひとりごと」ゝハ、ことのねにまぎるゝかたもありけるに、ふえのねハかしは木にをよびがたきとていで給ふに、御息所、

一、「露しげきむぐらのやどにいにしへの秋にかハらぬむしのこゑかな」。かしハ木のふえのねにかハらぬといひいだし給へる也。

一、「よこぶえのしらべハことにかハらぬをむなしくなりしねこそつきせね」、ふえのねはことさらにかハらねどかしハ木のむなしくなり給たると、なくねはつきもせぬと夕ぎりよミ給へる也。いでがてにやすらひ給ふ。〈9オ〉

一、とのにかへり給へれば、かうしなどおろさせて、ね給ひにけり。「此宮に心がけ給て」とハ、女二宮に、夕ぎり心がけ給て、ねんごろがり給ふぞ、と人〻のくもゐのかりにきこえしらせければ、かやうに夜ふかし給ふもなまにくゝて、いり給ふをもきく〳〵、ねたるやうにてくもゐのかりおハする也。

一、「いもとわれといるさの山のと」、引哥、いもあれといるさの山のやまあらぎ手なとりふれそやかをまさるかにやとくまさるがにや。

女二の宮、くもゐのかりにまさるかの心に、夕ぎりうたひ給ふ也。

一、こハなどさしかためたる。あなむもれいたや。こよひの月のみぬさともありけり、と、かうしあげさせて、みすまきあげなどして、夕ぎりはしちかくふし給へり。かゝるよの月に心やすくゆめみる人ハある物か。すこしいで給へ。引哥、かくばかりおしとおもふよをいたづらにねであかすらん人さへぞうき。「心やましう」とは、くもゐのかりは、心ぐるしとうちおもひて、〈9ウ〉きゝしのび給ふ。きんだちのいはけなくねをびれて、こゝかしこしづかならず、「女房もさしこめて」とハ、みな人〻戸さしこめてふしたる也。

一、「ありつる所の」とハ、一条の宮の人げすくなかりしを、夕ぎりおぼしくらぶる也。

一、「このふえをうちふきて」とハ、をくり物にし給しふえを、夕ぎりふき給て、「いかになごり」とハ、わがかへりしあとにも、一条の宮にハあそび給つらん、と思やり給ふ。ミやす所も、わごんの上ずぞかし、と思ひつゝふし給へり。

一、「こぎミ」とハ、かしは木、いかなれば女二の宮を大かたハやんごとなくもてなしながら、いとしもふかきけしきなかりけんと、それにつけても、いぶかしうおぼゆ。見おとりせん事こそ、いとをしかるべけれ、と夕ぎりおぼす也。

一、大かたのよにつけても、かぎりなくよしともあしともきく事ハ、かならずさぞあるゝかし、などおもふに、「わが御中の」とハ、くもゐのかりとのあひだ思やりもなくて、むつびそめたるあハれをおもふに、いとかうをし〈10オ〉たち、おごりならひ給へるも、ことハりおもひ給ふ也。「をしたち」ハ、無理にをしとをる也。

一、すこしねいり給へるゆめに、ゑもんのかミ、ありしさまのうちぎすがたにて、此ふえをとりてみる。ゆめのうちにも、なき人の、わづらはしう、此こゑをたづねきたるとおもふに、

一、「ふえたけにふきよる風のごとならバすゑのよながきねにつたへなん」、かほるにわがいへのほうをつたへんの心也。おもふかたことに侍りきと、かしハ木いふを、夕ぎりとハんとおもふほどに、わかぎミのねをびれて、なき給ふにゆめさぬ。此わかぎミいたくなき給て、つだミなどし給へば、めのともおきさハぐ。「つだミ」とハ、おさなき子の乳をはくをいふ也。「うへも」とハ、くもゐのかりもおほとなぶらとりよせて、みゝはさミして、ちごをそゝくりつくろひて、いだきゐ給へり。むねをあけて、ちをちごにくゝめ給ふ也。「御ちハかハらなる」とハ、めのとの乳をちごまいり給へば、くもゐのかりのちハたらで〈10ウ〉かハきたるを、心なぐさめて、くゝめ給ふ也。「かハらかなる」、かハきたる也。

一、「おとこぎミも」とは、夕ぎりも、よりて、いかなるぞなどの給ふ。

一、「うちまきし、ちらし」とハ、おんやうじ、よねをまきちらして、いのり奉る也。かやうにみだりがハしきに、夕ぎりのゆめのあハれもまぎれける也。

一、「なやましげにこそミゆれ」とハ、此ちごなやましげなると、くもゐのかりの給ふ。いまめかしき夕ぎりの夜ふかき月めでに、かうしあげられければ、物のけのいりきたると、わかくおかしきさましてかこち給へる也。「かこち」ハ、うらみ也。

一、「うちわらひて」とハ、夕ぎり、あやしの物のけのしるべや。丸かうしあげずハ、みちなくて、いりこざらまし。あまたの子のおやになり給ふまゝ、いたりふかき事の給ふとて、夕ぎりミやり給へば、くもゐのかり、さすがに物もの給ハず、いで給ひね。みぐるしと、くもゐのかりの給ふ也。〈11オ〉あきらかなるともし火のかげ、はぢらひ給ふさまにくからずと夕ぎりおぼす也。

一、此きミなづミて、なきむつかりあかし給ふつ。夕ぎりも、ゆめおぼしいづるに、此ふえのわづらハしくもあるかな、かしハ木の心とゞめておもへりし物の、ゆくべきかたにもあらず、女二の宮の御つたへハかひなきとや、かしハ木おもふらん。此よにてかずに思ひいれぬ事も、いまハのとぢめに、一念のうらめしきにも、まつハれて、くるしミとなる也。引、臨終一念生所是定。「ながきよのやミにも」とハ、いまハのきわの一ねんにて、長夜のやミにもまよふ也。かゝれバこそ、なに事にもしうしんとゞめじとおもふよなれ、と夕ぎりおぼしつゞけて、をだきにずきやうし給ふ也。をだきのてら、珍光寺也。

一、「又かの心よせ御てら」とハ、深草の極楽寺也。

一、このふえをば、わざと人のさるゆへある物にて、ひきいで物にし〈11ウ〉給ひしを、たちまちにほとけのみちにおもむけんも、たうとき事ながら、あへなかるべし、と思ひて、六条院にまいり給ぬ。源氏ハ女御の御かたにおハしますほどなり。「三の宮ミつばかり」とハ、にほふ兵部卿也。「中にうつくしく」とハ、御きやうだいたちの御中にとりわきてうつくしくおハする也。「こなたに」とハ、むらさきのうへ、とりわきてかしづき給へる也。「はしりいで給て」とハ、にほふ宮、はしりおハして、大将こそ、宮ゐだき奉りて、あなたへゐておハせと、しどけなげにの給へば、夕ぎり、うちわらひて、おハしませ。いかでかみすのまへをばわたり侍らん。いときやうぐならんとて、ゐだきて、おハします也。「きやうぐならん」とハ、かるぐしからん也。軽ぐ也。

一、人もみず。丸かほハかくさん。なをくとの給へば、いとうつくしてゐて奉り給ふ。「こなたにも」とハ、女御の御かたにも、二の宮とわかぎミと、〈12オ〉「二の宮」ハ、式部卿也。「わかぎミ」ハ、かほる也。ふたりあそびておハします也。源氏もうつくしがり給ふ也。「すミのほどに」とハ、にほふを、夕ぎりのまにおろし奉り給へる

也。二の宮見給て、丸も大将にいだかれんとの給ふを、にほふ宮、あが大将をやとて、ひかへ給へり。源氏御らんじて、いとみだりがハしき御さまかな。おほやけの御ちかまもりを、わたくしのずいじんにりやうじ給ハんとあらそひ給ふに、三の宮こそさがなくおハすれ。つねにこのかミにきほひ申給ふと、いさめ給ふ也。「このかミ」ハ、あに也。

一、大将もわらひて、二宮ハ、こよなくこのかミ心に所さり給ふ御心ふかくおハします。御としのほどよりハ、をそろしきまでみえ給ふなとの給ふ也。

一、みぐるしくかる〻しき公卿の御座なり。あなたにこそとてわたり給ハんとすれど、宮たちまつハれて、はなれ給ハず。

一、「宮のわかぎミハ」とは、かほるハ、宮たちの御つらにハあるまじきぞかし、〈12ウ〉と御心のうちにおぼせど、女三の宮の、御心のおにゝ思ひよせ給ふことやと、これも心のくせにいとをしうおぼさるれば、かほるをいとらうたき物にかしづき給ふ。大将ハ、此きミをよくもみぬかな、とおぼして、みすのひまよりさしいで給へるに、花のえだのかれておちたるを、みせ奉りてまねき給へば、はしりおハしたり。ふたあひのなをしのかぎりをきて、しろうひかりうつくし。おさなき人のきるをも、なをしといふ也。くびかミいれて、つねのこそでのやう也。「ふたあゐ」ハ、うすもえぎ也。「かぎりをきて」とハ、なをばかりをきて也。

一、「みこたちよりも」とハ、あかしばらの親王たちよりもうつくしき也。「なまめとまる」とハ、かしは木の事をうたがふ心もありてミ給ふ也。「まなこゐ」とハ、めのしんなど、いますこしつようかどあるさままさりてミゆれど、まじりのとぢめおかしうかほれるなど、〈13オ〉よくかしハ木におぼえ給へり。くちつき、ことさらに花やかなるさまして、うちゑミたるなど、わがめのうちつけなるにやあらん、「おとゞ」とは、源氏ハ、かならずおぼしよすらんと、いよ〳〵御けしきゆかしく、夕ぎりおぼす也。「宮たちハ」とは、親王たちハ、思ひなしこそけだかけれ。よのつねのちごとみえ給ふ。此かほるハ、いとあてなるにそへて、さまことにぞある、と宮たちにミくらべ給へる也。「うたがふゆへも」とハ、まことにかしは木の子ならば、内府の思ほれて、子となのりていで人だになき事、となきこがれ給ふに、きかせたてまつらざらん、つミえがましき、などおもふ。又、いかでさハあるべき事ぞ、と心えず思ひよりがたき事、と夕ぎりおぼす也。

一、「心ばへさへなつかしう」とハ、かほる、心ばへさへよくみえて、むつれあそび給へば、らうたくおぼゆ。「たいへわたり給ぬれば」とハ、源〈13ウ〉氏、むらさきのうへのかたへわたり給へば、のどやかに御物がたりしておハするに、よべかの一条の宮にまうでたりしに、女二の宮おハせしさまきこえいで給へるを、源氏ほゝゑミてきゝ給ふ。「むかしの事」とハ、かしハ木の事、かゝりたるふし〻ハ、あへしらひ給ふに、「かのさうふれんの心ばへハ、げにいにしへのためしにもひきいでつべきおりながら」とハ、女二の宮のかしハ木を思ひて、さうふれんひき給しハあハれなりしなどゝ、後代にいはれ給ハん事ハさもあハれなるべけれ、と女ハ、なをひき給ハすはよろしからんと源氏の給ふ也。女ハ、なを、おとこの心うつるばかりのゆへよしをも、おぼろげの事にてハもらすまじき物にこそありけれと、「思ひしらるゝ事どもこそおほけれ」とハ、女三の宮の事をした心にもちての給ふ也。「すぎにしかたの心ざし」とハ、かしハ木のゆいごんなどわすれ、ながきよういを人にしられんとならバ、おなじ〈14オ〉くは心きよくて、かゝづらひ、ゆかしげなきみだれなからんや、たがためも心にくゝ、めやすかるべき事ならんと、源氏の給へば、さかし、人のうへの御をしばかりハ心つよげにて、かゝるすきハい

でや、しのびあへ給ハぬと、夕ぎり源氏の御心をおぼしやる也。

一、「なにのみだれか侍らん。つねならぬよのあハれをかけそめしあたりに」、とハ、かしハ木の無常をとぶらひそめて、心みじかくとひすて侍らバこそ、中〳〵よのつねのけんぎありがほに侍らめとてこそ、まうでとぶらひけれ、と夕ぎりの給ふ也。「けんぎ」ハ、うたがひ也。「さうふれん」ハ、女二の宮、心ともていでゝひき給しかバこそ、にくき事ならめ。わがひきたるつゐでに、かしハ木の事思ひいでゝ、すこしひき給たるハ心にくくこそおりふしよしづきて、おかしう侍し。なに事も、人によりことにしたがふわざにこそ侍るめれ、と夕ぎり申給ふ。よハひなども、あ〈14ウ〉まりわかび給ふべきほどにもおハしまさず。又、あされがましく、物なれなどもし侍らぬに、うちとけ給ふにや。大かためやすき人さまになんなどきこえ給ふに、いとよきつゐでつくりいでゝ、ちかくまいりよりて、かのゆめがたりを、夕ぎり聞え給へば、とみに物もの給はでおぼしあハする事どもありて、そのふえハ、こゝにみるべきゆへあり。かれは陽成院の御ふえなるを、古式部卿の宮のいミじき物にし給けるを、かの衛門のかミ、わらハよりことなるねを吹いでしにかんじて、かの宮の萩のえんし給し日、をくり物にとらせ給へりし。女の心ハふかくもたどらで、しか物したるなり、など源氏の給て、すゑのよのつたへハ、又いづかたにとかハ思ひまがへん。かほるにとこそかしハ木おもふなりけん、とおぼして、夕ぎりもいたりふかき人なれば、おもひよる事あらんかしとおぼす。そのけしきを夕ぎりみ給ふに、いとゞ〈15オ〉はゞかりて、とみにもうちいできこえにくけれど、せめてきかせたてまつらんの心あれば、いましも事のつゐでにおもひいでたるやうに、おぼめかしうもてなして、かしハ木、いまハとせしほどにも、とぶらひにまかり侍しに、なからんのちの事どもいひをきし中に、しか〳〵ふかくかしこまり申すよし、かへす〴〵いひしが、いかなる事にか侍けん、いまにそのゆへなんおもふ給へより侍らねば、おぼつかなくと、たど〳〵しげにきこえ給ふに、源氏、さればよ、とおぼせど、なにか、そのほどの事、あらハしてもの給ふべき、しバしおぼめかしくて、しか人のうらみとまるばかりのけしきハ、なにのつゐでにかもりいでけんと、ミづからもえおもひいでず。さて、いましづかにかのゆめハおもひあはせてなんきこゆべき。よるかたらずとか、女房のつたへにいふなりとの給て、長〳〵御いらへもなければ、うちいで聞えてけるを、いか〈15ウ〉におぼすにかと、つゝましくおぼしけりとぞ。

一、「よるかたらず」、孫真人云、夜夢不須説。

一、「女のつたへ」とハ、ゆめハ児・女の信ずる所也。〈16オ〉